

補聴器は「人生を彩る必需品」 「耳から世界を変える」ために



群馬大学大学院 医学系研究科
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学
准教授 茂木 雅臣氏

群馬大学医学部附属病院は、昨秋、耳鼻咽喉科内に「聴覚インプラント・補聴器先端医療センター」を新設し、地域全体の難聴医療の底上げを図っている。茂木准教授は、群馬に生まれた新拠点の副センター長という要職を担う。

その茂木医師が「群馬イノベーション2025」(上毛新聞社主催)で最高賞(大賞)に輝いたニュースは、師走の補聴器業界を一気に駆けめぐった。この事業プランのインパクトは、やがて眼鏡業界にも及ぶであろう。補聴器がメガネと同じように受け入れられる社会」とは…。「耳から世界を変える」—そんな社会変革への展望を聞いた。

そして補聴器は訓練を重ねて徐々に慣れていくものだということが、なかなか理解されないことも挙げられます。

「こんなうるさいものを一日中つけると? 先生は鬼ですね」と言われることもありまして…。私自身も補聴器ユーザーですから、その気持ちは痛いほどわかります。補聴器を使い始めた方には、なんとかドロップアウトしないように支援したいと思ったのです。

ICTを駆使した、生活改善ツール、補聴器習熟支援の事業を構想したのは、2023年4月に群馬大学に赴任してからでした。本学はやはり総合大学なので、他学部の先生方と容易につながるができます。学



群馬大学医学部附属病院「聴覚インプラント・補聴器先端医療センター」の設立メンバー(左から、近松一朗センター長、茂木雅臣副センター長、篠原悠子氏(ST)、永田ゆりの氏(Dr.)、多田純恵氏(Dr.)、小原透氏(ST)

内で協力を要請したところ、理工学部の弓仲康史教授(仮想現実や拡張現実技術を用いた集積回路など、ICT(情報通信技術)の専門家)のご協力が得られることになり、また大学院生も一人参加してくれて、事業を加速することができたわけです。

補聴器リハビリは、専門家の指導のもとに進めていくのが本来のあり方ですが、残念ながら適切なリハビリを指導できる人材は限られています。そのため、適切にフィッティングされた補聴器を患者さんが日常生活の中で使いこなせるように、病院や店舗に通うのと同じレベルのリハビリが可能となる、いわば「生活改善ツール」をイメージしています。

例えば、飲食店、コンビニ、スーパーのレジ、病院の受付など、さまざまなシチュエーションを設定し、雑音下で会話を交わしていただきます。聞き取りのレッスンを受け、正答率が上がることにステージが上がるというトレーニングは、ゲーム感覚で楽しんでいただけるものです。AIとの会話なので、聞き間違いがあっても恥ずかしいことはありません。

4月以降に臨床研究を始め、事業化への歩みを進めます。クオリティを高めるためには、高額なプログラ

「補聴器」の名を冠した専門センター。当院は昨年11月、耳鼻咽喉科内に「聴覚インプラント・補聴器先端医療センター」(センター長・近松一朗教授)を開設し、私は副センター長を務めています。これは、増加し続ける加齢性難聴などに対応し、補聴器医療から人工内耳・人工中耳・骨導インプラントまで、難聴者へのあらゆる医療支援を一貫して提供することをめざした専門センターです。

耳鼻科領域で培ってきた診療実績と教育基盤を活かし、県内外の医療機関とも連携して難聴医療の発展に貢献したいという想いがあります。センターの名称にあえて「補聴器」という言葉を入れたのは、専門機関や他科の先生方はもちろん、地域の補聴器販売店の方々から見ても、補聴器のことを相談できる窓口がある、と一目でわかるようにしたかったためです。人生を前向きに変える大きな力を持っているはずの補聴器ですが、ユーザーさんが適切に使えないままにしておく、逆にストレスや諦めにつながってしまいます。

そこで私は4つの課題に挑んでいます。①補聴器習熟の支援、②難聴リテラシーの向上、③補聴器イメージング費用が必要になりますので、資金調達が残された課題となっております。ともかく難聴と補聴器をめぐる啓発を図るとともに、本事業の必要性を地道に社会に訴えていきます。

「当事者」としてのまなざしを注ぐ。愛用の補聴器を、タンズ補聴器にしてしまう高齢の方々、聞こえの悩みを打ち明けられない子どもたち、そんな患者さんを見てきたからこそ今の自分があるのだと思います。私自身、先天性の中等度難聴で両耳に補聴器を装着している当事者ですから、これまでの人生に敷かれていた伏線を患者さんと向き合うことで、回収しているような気がします。

難聴があることがわかったのは就学前健診のときでした。先天性ですから、もしかしたら皆も同じなのではないかと、子どもの頃は周りとの違いがわかりませんでした。なんとなく困っていたけれど、障害者と思われるのが嫌だったのでしょね。

補聴器を装着するようになったのは、実は耳鼻科医になってからです。大学病院に入局してまもない頃に、「君は困っていないかもしれないが、周りは困っている。すぐに販売店を紹介するから補聴器を作っ

ジの改善、④社会コストの削減です。ここでは、課題①を中心にお話しします。②④にもつながるテーマです。

「補聴器をドロップアウトさせない」「補聴器習熟支援」の一環として、私が取り組んでいるのが、「XR×AI補聴器リハビリで変える。聴く」の常識—老人の証を人生を彩る必需品へ」というタイトルで、昨年12月に「群馬イノベーションアワード2025」(大賞)をいただいたベンチャー事業です。補聴器リハビリを行う際に、臨場感あふれる拡張現実(AR)空間でアバターと会話し、聴取の精度を評価するなど、自宅にいながらにして補聴器の習熟に向けたトレーニングができるプログラムを開発しているのです。

さらに、従来の補聴器のイメージを払拭しようと、メガネ一体型の骨導補聴器の開発を通して、ファッションブルなスマートグラスとして装着できるようなプロダクトを構想しています。

私は補聴器外来で患者さんに補聴器の装着指導をする機会がありますが、同じように指導しても、上手に使えない方が一定数いらっしゃいます。その原因を探っていくと、一人暮らしをしているなど、補聴器を使う場面がない、つまり人と交流する機会が少ないこと、

「こい」と、先輩から勧められたので、半ば強引でしたが、気遣いのある先輩でした。私のためを思って助言してくれたのだとわかります。

それ以来、補聴器歴20年以上になります。言いかねない聞こえの悩みを抱えて来院される患者さんとの距離が縮まり、信頼感や説得力がちよっと上がるような気がします。学生の頃は相手の話が聞き取れないときに、聞き返さずにその場しのぎをする癖がっていました。補聴器があれば、そのようなごまかしはなんの意味も成さず、他者と正面から向き合えるようになるものです。

多様性社会のあり方、未来の補聴器像。群馬イノベーションアワードのプレゼン第一声で、私は「耳から世界を変える、そんな補聴器を開発している」と語り、補聴器を「老人の証から生活をアップデートするツールへ」と変革するビジョンを示しました。

「多様性社会」が叫ばれていますが、他者との違いを殊更に気にしない、そのような意識のあり方が多様性といえるのではないのでしょうか。そのときに、補聴器はメガネと同じように「人生を彩る必需品」となることでしょ。